

2025 年 11 月の総評に代えて 高橋修宏

客席を埋め雑食の大白菌

奎いう子（佐賀県）

この句の主体を、「雑食の大白菌」としたことで、さまざまに想像させる余地が生まれた。レストランなどの光景のようでありながら、どこか儀式めいた饗応のイメージさえ想起させるようだ。

あぶなくて削られた角
待ち合わせ場所をなくして
すれちがう私たち

こはくいろ（大阪府）

「あぶなくて削られた角」が、何であるのか具体的な描写は一切ない。それにも拘らず、「すれ違う私たち」が不思議と生々しいリアリティを湛えている。

つま先を
不純に使いきることを
決めたのは栈橋のかえりみち

汐見りら（東京都）

二行目「不純に使いきる…」に不穏な気配が宿る。その場所が「栈橋のかえりみち」であることで、たちまち情景が具体性を帯びてゆく。ミステリー映画のシークエンスを想起させるような、作中主体の心理描写が秀逸。

深呼吸を楽器として
沈黙さえも曲にする
身体は小さな音楽堂

寸草（東京都）

かつて現代音楽家の武満徹は、音楽の起源をめぐって次のように記した。「(……) 人間が地上にあらわれた太古のときから音楽はあったに違いない。人類が心臓のビートをこ

の肉体にもつ限り音楽はあったわけです。」(『樹の鏡、草原の鏡』より)。まさに、この武満のエッセイと呼応するような作品。とりわけ「深呼吸」、「沈黙」という無音さえも音楽として把握する眼差しに注目した。また、ジョン・ケージとの共鳴も感じさせる。

「じょーきょーする」

柳葉魚を齧ってふという子

鷺浦 るか(富山県)

「柳葉魚」(シシャモ)は、川と海をめぐる回遊魚。「じょーきょーする」という唐突な子どもの発語によって、「子」と「柳葉魚」のイメージが重なり、ふいに入れかわるような感触さえ生まれる。

髪の香の向うのひとに貸すカフカ

白鳥 陽太(神奈川県)

「カ」の音韻に注目した一句。わずか十七音に「髪の香」、「貸すカフカ」と五音も入っている。ささやかな景でありながら、「カ」音の連なりと「カフカ」によって不思議な気配が生まれた。

言い草や仕草を摘んで

粥にした

仮野(栃木県)

それぞれの単語の中にある「草」に注目した作品。二行目「粥にした」と転じることで、お茶目なユーモアが生まれた。七草粥のパロディか。

山眠るかかとの靴下の薄さ

ももか(岡山県)

もちろん「山眠る」は、冬の季語。「かかとの…」は作者の身体性が書きとめられているが、「薄さ」によって意外な体感が生まれた。季語と身体の、かすかなズレが現代性であるのかもしれない。

雪原の絵葉書を見たタイの友
あたたかそうねと返事をくれる

南場 豊子（栃木県）

「あたたかそうね」が、いい。やはり、雪の降らない国の人から見たら、まっしろな「雪原」は「あたたか」な風景に見えるのかもしれない。そんな、ささやかな発見が効いている。

オリオンの空が鼻腔を凍らせる

水野果（富山県）

素直に捉えた一句。「オリオンの空」という把握が、単なる叙景であることを超えて、その「鼻腔を凍らせる」感覚に、ささやかな神話的ストーリーを付加する。